

「やすさ」に流されずに

テレビのグルメ番組に登場するタレントが食事をしながら、「これは、軟らかくて、食べやすい」などと評するのが目立ちます。食べやすさが喜ばれるようです。

教育界では「分かりやすさ」を求める傾向が強まっています。分かりやすい授業が重視され、分かりやすい情報提供や説明が求められます。日本で行われている子ども(保護者)の学校評価項目には、「教師は分かりやすい指導を工夫しているか」などの項目が設定されたりします。

確かに、授業や説明は分かりやすいほうがよいと思います。しかし、授業の場合、分かりやすさを追求するあまり「分かりにくさ(理解の困難さ)」が全く排除されてしまってよいのでしょうか。常に、教師が子どもに分かりやすいよう教材をかみ砕いて与える授業ばかりでよいのか、という疑問を感じます。それは、あたかも親鳥がそしゃくした餌をひなに与える姿のようです。

帝京大学の佐藤晴雄氏が次のように言っています。「学生の頃に、教育哲学を専攻していた。デューイの著書は比較的理解しやすかったが、カントの『純粹理性批判』などは分かりにくかった。同じページ、同じ行を何度も繰り返しながら読み進めなければならない。むろん邦訳である。あまりにも理解できないので、本を投げ捨てたくなることもあった。ところが、何度も読み返していくと、だんだんその意味が理解できるようになる。分かろうとすると、分からなかったことが次第に分かるようになるものである」



授業の場合も、時には子どもの分かろうとする力を引き出すような、一見分かりにくい、歯ごたえのある授業があってもよいと思います。分かりやすさを追求した授業ばかりでは、分かろうとする力が育ちにくいと考えられるからです。

軟らかくて食べやすい物ばかり食べていると、かむ力が弱まります。それと同様に、分かりやすい授業ばかり受けていると、考える力が弱くなるのではないのでしょうか。その意味で「やすさ」に流されてはいけないと思います。

今月、授業参観と学級懇談会が行なわれました。保護者の皆さまからの温かい励ましや厳しいご指摘は学校に対する期待と受け止め、教職員一同全力を上げて努力します。これからも、変わらぬご支援やご理解、ご協力をよろしくお願い致します。

(※ 5月30日、事務室と図書室は閉室となります。ご承知おき願います)